

名詞文と日本語

工藤進

バンヴェニストは「バリ言語学会年報」(一九五〇)に「名詞文」(名詞の動詞のような繋辞なしの文)についてすぐれた論文を発表、その後この文は「一般言語学の諸問題Ⅰ」(一九六六)に収められた。このなかでバンヴェニストは名詞文と繋辞付きの文との違いを詳細に検討している。

ギリシャ語では繋辞 *esti* のない構文、ヘー・クレーター・ネーソス(クレータは島である)にたいし、*esti* 付きの構文、ヘー・クレーター・ネーソス・エステイがある。後者の繋辞付きの文は、時間、空間において限定された個別的事態を強調しようとする歴史家とか地理学者、教師などの視点を以ている文体である。実際 *esti* という現在形の動詞は特に事態の現状に關わる。過去あるいは未来の状況は、知られていないというわけではないが、この「語りの現在」という視点によって想定さ

れるだけである。

他方、名詞文は現時点の状態を伝えるのに適しているわけではなく、時に関係しない事態、たとえば格言とか諺、つまり一般的な真理の表現にすぐれる。

古代ギリシャ語以上に、繋辞動詞なしの文を多用したのはサンスクリット語である。*aham agnih, tvam varmah, 我はアグニ(神)、汝はヴァルナ(神)*、*vanam gatā Damayantī, 女はアグニ(神)は森へ行つた* (*gatā* は「行く」を意味する動詞 *gam* の過去分詞、女性単数主格)といった繋辞動詞のない表現がサンスクリット語にはふんだんにある。これが例えば、(*aham) agnirami* (我はアグニである)、(*tvam) varuno'si* (汝はヴァルナである)のような繋辞動詞付きの文になると、なぜか芝居での役割を言っているような仮定的な感じになる。二つの名詞を繋

げるとき、現代印欧語ではほとんど排他的に。動詞が用いられる。しかしこれは表現の明晰性を増しはしたが、時間にしぼられることのない真実を表わす力を衰えさせることとなった。

パンヴェニストによれば、「名詞表現はそれ自体完全なものであり、その言述は時間あるいは法による位置付けのそと、語り手の主体性のそとに置かれることになる」(「諸問題」一巻一六〇頁)。

我々はこれから、「名詞文」という点について、日本語ではどうか、ということを中心に検討してみたい。

「海は暗い」「クレータ島は大きな島だ」という、現代印欧語の多くでは、be動詞にあたる繫辞を必要とする文(La mer est sombre; La Crète est une grande île)が、現代日本語では上述のように、「は」とか「だ」という小辞を用いて表わされる。助詞「は」は間投詞的な起源であるとする辞書が多い。「日本語助詞の研究」(桜風社一九八八)の著者、此島正年によれば、感情的な起源を持つ「は」とか「こそ」の類の助詞は間投詞の類に非常に近い性格をもつものである、と述べている。個人的には私は、「この「は」は、強調的起源の人称代名詞、「わ」、琉球での「ば(は)」に繋がるのではないかと考えている。

「だ」は動詞的なものであり、「である」「です」「なり」に変えてもよいし、「だ」を除いて言い切りにしてもよい。日本語では、be動詞にあたる繫辞動詞は必ず用いられるとは限ら

ないが存在する。この点、日本語はこの種の繫辞を欠く言語とは異なる。

「だ」「も」である「も」「にてあり、んである、であ、だ」と縮約した動詞の複合形である。「です」「は」「にてござり(あり)ます、でござんす、であんす、です」「あるいは、にてあります、でありんす、です、です」「なり」「は」「にあり」である。ところで、初期形すべてに共通して用いられている「あり」は、主に人に用いられる「居り」、あるいは来「こ、き、く」、為「せ、し、す」といった単音節動詞と同様、最も古い日本語動詞の一つである。「あり」と、後に「居る」となった「居り」との間の語源的つながりは明らかではない。「あり」「をり」の間に母音の交替があったのだとすれば、「をり」はわ行であるから、「あり」の起源として、「わり」のようなものを考えねばならないが、この形は文証以後は存在しない。もう一つの存在動詞「はべり」は「這ひ・あり」という二つの動詞からなる合成動詞である。

「あり」と「をり」が古い動詞であることは、その終止形にふつつ終止形、連体形双方に用いられる動詞語尾「る」ではなく、連用語尾「り」が用いられていることからわかる。否定形が「あらず」「あるいはなし、ない」である動詞、「あり」の語源は定まっていない。しかし構成要素は「あ」と「り」の二つであり、この「り」は後にいたるところで「る」となった古い動詞語尾である。この二つの動詞語尾「り」「る」を別にす

ると、「二」での動詞起源の問題は、「ある(ある)、くる(くる)」の間になにか関係があるかどうかにつきるが、「二」ではこれ以上先に進むことはできない。小学館「古語辞典」(一九六三)の中で著者、中田祝夫は「あり」の「あ」は「あらわる」の「あ」、「生る(ある)」の「あ」と関係するだろうと述べている。

「です」「には」「でした(過去)」「にて」「ござりましてあり、で」「ざんした、あるいはは、にてありましてあり、でありんした、でありんした、でんした、でした)、」「でしよう(未来、仮定)」「にてありませむ、んでありんせう、でせう、でしよう」といった合成変形があるが、まだ動詞として感じられる。しかし、「だ」は、「だった()」にてありてあり、「あり」を繰り返して強調し、過去の意味を得る、んでありたり、であつたり、であつた、だつた)とか、「じゃない(否定)」「ではない、じゃない」という変形があるが、これらは動詞というよりは肯定、あるいは提示詞にすぎないものと感じられる。

「島だー」はしたがって、フランス語で言えば、(Voilà) une île: というようなものである。この「だ」も必要というわけではない。「クレータ島は大きな島」、それだけで十分である。「二」での「は」のはたつきは二つの名詞、すなわち「クレータ島」と「大きな島」とを並列し結ぶことである。この「は」は主語「クレータ島」を特立し、非動詞的述部である「島」を提示する。これは二つの名詞から成る完全な断言文である。

「海は暗い」においては、「は」は主語「海」と述語「暗い」を結び、「は」は主語である名詞(句)(の要素を他と分離して目立たせる役目を果たしている。「海は暗い」しかし空は明るい)。その結果この繫辞「は」はそれが付着している語(海)のみではなく、言述全体を特立させることになる。

古い日本語では、「この助詞「は」は用いられないことが多い。「海は暗い」は「海暗し」であった。この二つの言い方の間にはわずかの違いがある。「は」を用いない言い方は「海」をことさら特立するわけではないので「海」以外のもの、例えば「空はどうか」ということを言外に想起させるわけではない。「海のある状態そのものを総体として提示しているのである。「二」では「海」と「暗し」は対等に並べられている。「海は暗い」が「空は明るい」といった見えない立体構造を思わせるものではない。二つの語が対等に並べられただけなのだが、一方は主語であり他方は述語であることははっきりしているので解釈が混乱することはない。

古語では「海は暗し」と言うことも可能である。フランス語の *La mer sombre* は「暗き海」(現代語では「暗い海」)である。古語では属詞の機能をもった形容詞(暗い)は、附加の意味をもった形容詞(暗き)と形態が異なる。したがって小辞「は」を用いなくとも、現代語では同じ形である附加形容詞と属詞との混同は避けられていた。しかし周知の通り、現代語ではこの二つの機能は一つの形(暗い)で言い表わされる。「暗き海」は

「暗い海」である。一方、「は」を用いない「海・暗い」という表現は、これが「海は暗い」であるのか、「暗い海」であるのか一瞬とまどうような落ち着かない言い方である。

「は」の使用(海は暗い)は、「海」を特立すると同時に、「暗い」という語の述語属詞性を明確にしている。フランス語で言えば定冠詞である。

「名詞構文」のなかでバンヴェニストはフィリピンのタガログ語の例をあげている。この言語では、形容詞の付加(連体)の意味と属詞の意味は、日本語の助詞に似た二つの小辞の使い分けによって表わされる。一つの小辞は冠詞の機能を果たしているが、それが形容詞の前で繰り返されると、その形容詞は付加的意味になるのである。日本語でこの構造を仮に表わすと、(は)子(は)良い=この良い子、となり、もう一つの小辞の場合、同じ構造で形容詞は属詞的性格が与えられ、(へ)子(へ)良い=この子、良い子=この子は良い子だ、となる。

タガログ語では述語(属詞)的表現(この子は良い)はまた、形容詞の前置、主語の後置によっても得ることができる。日本語での助詞の前置はあり得ないが、タガログ語と日本語の間には繫辞動詞の不使用、および小辞の使用の点で構造的共通点が見られる。

助詞の「は」は付着する名詞のみならず、文法的機能だけを

表わす語(助詞、助動詞など)を除き、ほとんどすべての語を特立させることができる。「明るい空、暗い海」「走るは彼」といった具合である。

「むかしむかしある男がいた。その男は……」といった昔話の冒頭では、ある男はいた。その男が……」というふうにはならない。というのは最初はこの男を提示せねばならず、いったん男が示されると次にはこの男自身の存在ではなく、属性が問題となるからである。主語を紹介的に特立させるときは「が」、その属性を述べるときは「は」を用いるのが普通である。日本語が重要視しているこの強調点の違いは、印欧語の多くでは冠詞、アクセント、抑揚あるいは語順の微妙な塩梅で表わすことだ。だろ。

日本語ではまた、小辞(助詞)抜きの方が常に可能であることを付け加えておかねばならない。「私、社長です」「社長(です)、私」という言い方の場合、表現性の種類あるいは程度にしたがって、強勢は主語、述語のどの語にも置かれる。肯定的語尾の「です」に置かれる場合はカマトト的気取りのよくなものを表わすことになる。

我々は、この二つの小辞「が」と「は」が、古い間投詞、あるいは指示詞(ナ・汝、ワ・吾)に起源をもち、後置されることを除けば、印欧語の冠詞と同じ機能をもつものであると考えている。これ以上の推測はやめるが、少なくともこれらの小辞には動詞的要素が微塵もないと言つことはできるだろ。時の

観念(起源的にはアスペクト的なものである)がなく、述語部分の動詞的な言い方に頼らないと否定も作りだせないということがその根拠である。というのは、文法的「時」と「否定」とは、基本的には動詞組織を前提とする統辞法の分野に関係しているからだ。したがってこうした小辞で結ばれる非動詞文もまた、名詞文であると言えるのである。

さて、名詞文と否定との関係は実際どのようになっているのか。無知、反感、不寛容、無意味といった語がもつ否定の概念を意味論的に考えるのではなく、形式的、統辞論的に検討してみよう。

印欧語において「動詞」と呼ばれる品詞は不定形、分詞、あるいは動名詞といったさまざまな形のもとで名詞にもなりうる。英語の stop は「止まる」ことでもあり「止まり」でもある。「往復」aller et retour という言い方における aller は名詞である。名詞は主語にも補語にもなりうる語である。これと同じようなことは日本語にも起きている。日本語ではぶつうは名詞につく「は」とか「が」という助詞が、「行くは彼」という言い方では(名詞的に用いられた)動詞に付くことができる。日本語の動詞活用での名詞形は、終止形「行く」に対しては「行き」といつぶつに、活用形の多くが母音のイでおわる連用形と呼ばれるものである。このイの形は、「行き・ます」「行ってみる」行き・て・みる」といつぶつに、名詞として動詞句を構成する。

昔の日本語の動詞活用にはこのイ、ウ語尾の形の他にもう二つの語尾がある。完了を表わす「行ケ・ば」(このバは此島正年によれば、小辞の八が起源)と、未完了を表わす「行力・ず」(に・ず、んず、ず)であり、否定には動詞のこの「行力」という未然形を用いる。エとアとの違いは小さくはない。

要するに、古い日本語動詞の活用には四種の相があり、そのうちの二つの、名詞としても用いられる形のなかの一つが終止形と呼ばれて不定形の役目を果たした。終止形は動詞的述語(行く)にも、名詞の修飾詞(行く我)にもなった。四種の相はすなわち名詞相(行き 連用形)、動詞的名詞相(行く 終止・連体形)、完了相(行ケ 已然形)、未完了相(行力 未然形)である。ここで定説となっていることがある。まず「ある」に先行して「あり」があったらしく、一般に動詞ではイ語尾つまり名詞語尾(のほ)がウ語尾よりも古いものだったらしいこと。それに母音のエはア・オ、イ(ウ)のあとにできたものらしいこと。の二つである(松本克己一九九五)。

このことを動詞組織にあてはめてみると、動詞活用はイ(動名詞・完了)と、ア(オ)(未完了)の二つに大別することができる。すなわち「行く」「来(ク)、来(ク)、来(ク)」「行キ、行ク、行ケ、来(コ)、来(キ)、来(ク)、来(コ)」それぞれ四つの形は、行力と行キ、来(コ)と来(キ)の二つの形に縮約されうる。「行く」の活用を構成する二つの柱は完了の「行キ」と未完了の「行力」だったのかもしれない。動名詞・完了

相(行キ)は已然形(行ケ)の代わりを作りだすことができた。行ケ(行力+強意のイ)バ、は名詞、行キを用いた行キ・テ・アレ・バ(行ツタレバ)というような回りくどい言い方でも表現することができた。日本語では、名詞完了相と未完了相という二つの形をもとに動詞組織がつくられたように私には思える。日本語の否定は、連用形という動詞の名詞形ではなく、未完了(未然)形を用いて表わされる。「東京は島ならず」に「あらず」は「東京は島なり」に「あり」の否定である。注意すべきことは、否定をあらわすには常に動詞句を必要とするということだが、これは現代印欧語でも同じことである。歴史的否定形、あるいは話法の不定形と呼ばれる表現 (*in le citadin de die*、*そこで都会の人が言った*) というような言い方。これも我々に言わせれば名詞文である) に否定がほとんど見られないのは、回りくどくなく物事をまっすぐに言いたいという必要と、活用がないことからくる表現の柔軟性の欠如によるものだろう。

これまで述べたことからどんな結論が導き出されるだろうか。時間的な客観性と物事の因果関係に敏感な印欧語の人々は、細々した言葉の切れ端から知的作業に適した見事な道具を営々として作り上げてきた。日本語は、名詞文と限らず一般的に、言述を時と空間とに厳密に位置づけることには興味を示さなかったように見える。指示の起源をもつ小辞、強意の「行キ」と非強勢の「行力」に見られる動詞組織の二元性、また、「火

(ヒ)、「火(ホ)」、「目(メ)」、「目(マ)」に見られる名詞の二元性、といったように、印欧語と極めて似た条件から出発した日本語は、言述の時の周りにただよっている主観的な関係の均衡をとるほうに楽しみを見いだしたようである。

日本語は、動詞の繫辞があるうとなかろうと、述語が名詞の觀念の主観的側面を好んで反映する、という意味では、本質的に名詞文的である。日本語で大事なことは、あるものあるいはある事態が言述の時の態勢において、完了しているのかそうでないのか、ということである。未完了形はまだ起きてない事態、つまり仮定的、未来的あるいは命令的な状態(行力・ム、来コ・ム、古くは、来コ) それに否定を表わすのである。

一方、間投詞、指示詞あるいはふつうの名詞といったすであつた語から作りだされた助詞は古い日本語を構成する本来的な要素ではなく、比較的最近(といっても二千年以上は前のことだろう)でできたものである。しかしいま見たとおり、この小辞のおかげで我々は語り手の注意がどこに、どのように向けられているかがわかるのである。日本語の名詞文による言述は、パンヴェニストの言う、語りの主観性のそこにあるわけでは決してなかった。日本語の文法は西欧的な目でみると、客観的厳密性を欠いていたかも知れない。しかし、これにはある種の主観性のみかえりがあつたのである。こうした助詞を備えた日本語は、これでも「言葉の法」の一つの大きな可能性を示しているのである。

(あとがき) この文は、リモージュ大学との仏文による共同誌TOZAI「東西」の四号に載せた *Autour de la Phrase Nominale en Japonais* と題した文章の、筆者本人による翻訳である。フランス人にわかるように書いたので、日本語を知る人には無用な部分は省き、少し変えてある。TOZAI四号はまもなく予定なので、フランス語版のほうが早いかも知れない。同じ号には *Sur un ancien verbe japonais "Wuj" (古動詞「ウ」について)* という題の本論に続く文章も載せた。五号には *Sur la déclinaison verbale en japonais* 「日本語動詞活用の起源について」と題した文を予定している。この「名詞文」についてと、「古動詞「ウ」」についての覚え書は、日本語の動詞活用の起源を考えるための序である。

二〇〇〇年十月九日